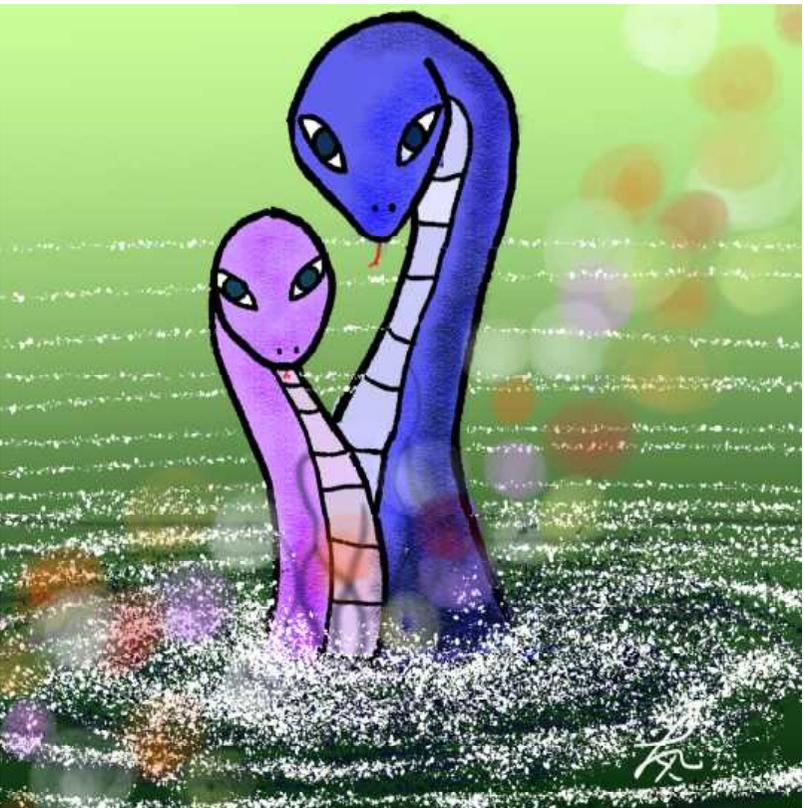


床山の池の蛇婿・隠岐郡隠岐の島町山田

令和3年10月26日

収録・解説・酒井 董美^{たじよし} イラスト・福本 隆男語り手 吉山秋男さん（大正元年生まれ）
収録・昭和54年8月7日

一宮の屋号は忌部いうてね、そこのお嬢さんが中村へ遊びに行つて、床山の池のほとりに行つて、にわかには夕立で、小屋に入ったら美青年が本を読んでおつた。

あまり言葉も交わさんここに、夕立も晴れたし、中村へ行つて、一晩か二晩か泊まつたらすわね。

また帰り道で、そのときも同じように夕立がきて、またその小屋に入ったらその男もおつたらしいですわ。そして、まああまり言葉も交わさんここにそのまんま別れて帰つたそうなの。

その忌部いう水若酢^{みずわかす}の官司さんですが、正面の玄関と中戸口があつて外来者の入る縁があるが、そこんここに毎朝、草履が濡れたのがあつけど、おかしいなあ、こらおかしいなあ、言つて、毎夜毎夜だから、その下男が後つけたら床山の方へ行く途中から見失つて、どうもおかしい。

そうしたら、こんど娘さん

が両親に向かつて、「わたしは床山の池へ行く」言うんだそうなの。

「そら、どういいうわけだ」と親が聞いたら、娘さんは、「床山の主に自分は見初められたから、どうしても行かねばいけん」

「や、そりやいけん」
「だけど、わたしはこの家におられんから行かしてくれ」。
娘さんが言われることに、もう両親もしかたなく、

「そんならもういつ去りに行く」という日にちも決めたらすわね。

そうしたらね、お嬢さんが、こう鏡に向かつて化粧するときに、よそのもんがこう見たら鏡には蛇体が映つてね、それから、出入り、子方、両親とみんな駕籠でついて行つて、そいで池のほとりまで行くだけね。

そいで自然に水の中、ずうーと入つて姿が見えなくなつて、で、両親の方は、「せめてもう一回だけ姿を見せてくれ」。

そうしたら、水面にこう浮き上がったらお嬢さんの真正銘の姿が現れたらしいで

すわ。やつぱし親のことだから、このまま沈んだら名残つかんがね。

「もう一度」「もう一度……」言うたらね、
こんだー（今度、池の中の水辺に当たつて煮えくり返るようになってね、水がめの中から二匹の大きな蛇がぬうーと出て来てね、

で、それ見て親子の縁が切れたわけだ。そして、ま、家へ帰つたらすわね。

で、その池がやつぱし今でも、この地区では七月二十四日に紙で御幣を切つて、そこへ持つて行つて祭るですわ。小さいほこらがありましたもん、

わ。そういう伝説があつてすわ。

解説

本格昔話の「婚姻・異類」に属している「蛇婿入・芋環型」が島後地区では昔話の「蛇婿入り」が床山の池と関連づけられ、伝説化しており、当地でこの話はよく知られている。

（元島根大学法文学部教授）